

鄧小平の世界認識に注目

中国内政の基調は、いまや「四つの現代化」を目標として大きく変化している。この点ですでに非毛沢東化が潜在的に進行している。私は考えているが、このような内政の変化はどのように外交に反映するのであろうか。

内政と外交との相互関係ということはよく言われる言葉でもあるが、外交は内政の延長だということも、いわば常識になっている。しかしながら、その関係がもっとも高い度合いを示してきたのが、これまでの中国であった。しかも中国の場合、外交と内政との接点に立って内政の諸条件に影響され左右されながら外交政策を決定する政策決定者の個性が、あるいは政策決定者の世界認識が非常に大きく中国の外交政策を左右してきたわけであるが、そのような個性は同時に、大きなリーダーシップと政策立案能力を持っている人物によってこそ実現されてきたのである。いうまでもなく周恩来がその第一人者であった。

このように考えてきたとき、今日の中国ではまさに華国鋒ではなくて、鄧小平こそそのような能力を持った人物であることは疑い

ないところである。すでに今日、華国鋒は、政策的には内外ともに鄧小平路線を受け入れざるを得なくなっている。それはまさに中国

社会の底に流れる潮流に逆らわずに立脚しているからであって、そうした状況のなかで、とくに外交政策においては鄧小平のもつ個性というものが大きな意味を持ってくるように思われる。鄧小平は七月下旬に再復活して以来、早くも八月

下旬には北京で北朝鮮の大使と会談し、彼が中国外交の第一線に立つてであろうことを示唆したが、今回のパンズ米閣僚長官訪中に際しては、鄧小平がかつてキッシンジャー、フォードなど米側首魁のホスト役であったのと同様に、再び中国側のホスト役として実質的に今回の米中首脳会談を取りしきったのであった。

政策立案能力をもつ鄧小平

このように考えたとき、やはり鄧小平の世界認識なり、米中関係あるいは中ソ関係に対する見方というものに、われわれは注目を向けるべきではないのである。

鄧小平はかつて「三つの世界論」を一九七四年に國連の場で唱えた人物であるが、この「三つの世界論」が名目的には毛沢東思想

に依拠しながら、かつての実権派時代の中国の世界認識であった「中間地帯論」の変形であったように、基本的には鄧小平の世界認識はやはり実権派の世界認識に立脚しているからである。この実権派的世界認識は、毛沢東のよう

にソ連に対する怨念(ルサンチマン)にすべての基礎を置いて國際政治をすべてその点から規定する方向、つまりソ連と席を同じうせ

るべきというソ連に対する非常に強い感情的ないしは感情的な反感をもつて中国外交の底辺を固定してしまおうのではなく、鄧小平自身、かつては中ソ論争の第一線に立ちながら、彼の同僚であった

鄧小平はかつて「三つの世界論」を一九七四年に國連の場で唱えた人物であるが、この「三つの世界論」が名目的には毛沢東思想

脚していった立場に同調していた

最近中国政治事情

焦眉の課題は日中平和友好条約交渉問題

解説その2

申嶋嶺雄



ことに示されるように、いかに宿命的な中ソ対立といえども状況に応じてかなり機動的、政策的な対応政策を形成しようする幅をもった人物なのである。

この点で当面の中国がいわば「毛主席の革命的な外交路線」といわれるこれまでの国家外交を離脱することはなく、その趣

をかなり注目し、これまで鄧小平個人をひとことも批判したことがないように、その出方をいわばかたづけを待っていると言っている。中ソ関係が今日のような極限状況に達しているだけに、そこ

をかなり注目し、これまで鄧小平個人をひとことも批判したことがないように、その出方をいわばかたづけを待っていると言っている。中ソ関係が今日のような極限状況に達しているだけに、そこ

なるとするならば、それはかつて劉少奇、鄧小平時代の中国が、決してソ連と決定的に決裂したわけではないことに示されるように、ある種のソ連関係の復原力がそこ

に作用するのではあるまいか。この点でまさに鄧小平は、米中関係の推移如何を中ソ関係に反映させることが出来るような政策立案能力を持つ人物だといえよう。現

にソ連はこのように鄧小平の政策

にソ連はこのように鄧小平の政策

くは鄧小平の復活のありよう如何というふうに考えられるように思われる。しかも鄧小平は華国鋒体制のもとでこのまま確々諸々としてその余生を終るのであろうか。

ついで最近伝えられるところによると、鄧小平はあと八年か十年は大丈夫だとみずから語ったという。私は鄧小平ほどの人物であれば、その革命経歴からしても、そのパーソナリティからしても、そ

から一日も早く解き放たれて、もっと毛沢東自身を相対化したい、ある意味では毛沢東を諷刺してみたいという欲求に駆られているはずである。

から一日も早く解き放たれて、もっと毛沢東自身を相対化したい、ある意味では毛沢東を諷刺してみたいという欲求に駆られているはずである。

鄧小平の賭けは非毛沢東化

歴史に名を残そうとする鄧小平に、毛沢東化を指向した場合、ソ連との関係が切れる中ソ友好同盟条約をめぐって、ひとつの大きな転機を迎えようとしているのだが、片や米中関係は、おそらく来年以降

の、つまり米中関係が行われたあとの、米中関係正常化がどのような方向で行われるかによって、ひとつの大きな転機を迎えるような気がする。

中ソ、米中という、この大きな国際関係のなかで、日中関係は如何にあるべきかという、そのような

如何にあるべきかという、そのような

打倒し、江青夫人をあれほど倒すしながら、その夫である毛主席は絶対に正しいという、この論理の矛盾である。そしてあの天安門事件が示したように、中国の民衆は、そのようないわば毛沢東神話

の課題が、この秋以降、かなり焦眉の課題になるであろう。しかしながらその場合に、最低限、中ソ関係や米中関係の推移との関連を十分に展望しようとするヴィジョンを持たなければならぬと思

う。まさに中ソ関係は一九八〇年に期限が切れる中ソ友好同盟条約をめぐって、ひとつの大きな転機を迎えようとしているのだが、片や米中関係は、おそらく来年以降

の、つまり米中関係が行われたあとの、米中関係正常化がどのような方向で行われるかによって、ひとつの大きな転機を迎えるような気がする。

この点で当面の中国がいわば「毛主席の革命的な外交路線」といわれるこれまでの国家外交を離脱することはなく、その趣

をかなり注目し、これまで鄧小平個人をひとことも批判したことがないように、その出方をいわばかたづけを待っていると言っている。中ソ関係が今日のような極限状況に達しているだけに、そこ

をかなり注目し、これまで鄧小平個人をひとことも批判したことがないように、その出方をいわばかたづけを待っていると言っている。中ソ関係が今日のような極限状況に達しているだけに、そこ

をかなり注目し、これまで鄧小平個人をひとことも批判したことがないように、その出方をいわばかたづけを待っていると言っている。中ソ関係が今日のような極限状況に達しているだけに、そこ